

CRNA 主調査: ケーススタディレポート

マレーシアカンントリーレポート

マレーシアの幼児教育に関する洞察: 幼児のレジリエンスと社会情動的スキルの育成

マズリナ・チェ・ムスタファ¹ & アミナ・アヨブ²

¹ マレーシア スルタン・イドリス教育大学 (SIEU) 国立幼児発達研究所 (NCDRC)

² マレーシア スルタン・イドリス教育大学 (SIEU) 人間発達学部

¹ マズリナ・チェ・ムスタファは責任著者である。

要旨:

本レポートは、4～6 歳児のレジリエンスと社会情動的スキル (SES) の発達に焦点を当て、マレーシアの幼児教育 (ECE) の現況について詳しく論じるものである。本研究では、レジリエンスと社会情動的スキルの育成について保育者の考え方、取り組み、課題について洞察を得るために、フォーカスグループとのインタビューおよび保育者との個別インタビューを組み合わせた調査を実施した。その結果、保育者たちが社会情動的スキルとレジリエンスを子どもの社会的インタラクション、感情の制御、適応的な対処法のための重要な基礎能力として認識していることが明らかになった。また、様々な情報源を活用して理解を深め、効果的な教育的アプローチを実践していることも確認できた。一方、正規のレジリエンス評価ツールが欠如しているため、保育者が保護者にフィードバックを提供する際には自身の観察、判断力、一人一人に合わせたコミュニケーション戦略に依存している、などの課題も判明した。保育者の中には、マレーシアの幼児教育現場における社会情動的スキルとレジリエンスの理解と実践を促進する重要な要因として、文化的および言語的な視点を指摘する者もいた。レジリエンスを育成するために幼児教育・保育施設で取り入れているアプローチに関しては、ソーシャルサポートネットワークの構築、感情制御スキルを教えること、子どもの自立心や自信の強化などが挙げられた。こうした取り組みは最終的に子どものホリスティックな発達と将来の成功に貢献すると考えられている。こうした調査の結果から、社会情動的スキルとレジリエンスの育成における保育者の役割が極めて重要であることが明らかになった。マレーシアやその他の国における幼児教育の質を高めるためには、標準化された評価ツールの開発や文化的にインクルーシブな教育実践の促進に向けた取り組みが求められる。

キーワード: マレーシアの幼児教育、レジリエンス、社会情動的スキル、レジリエンスと社会情動的スキルという用語の文化的解釈、子どものレジリエンスを育成するアプローチ、マレーシアの幼児が直面する逆境と困難。

1.0 はじめに

幼児教育政策: マレーシアでは、正規の教育は 4 歳で通園することから始まる。ただし、義務教育ではない。6 歳未満の子どもも多くは、正規の学校制度に入る前の準備段階として、幼稚園に入園する。マレーシアの幼児教育 (ECE) は 2 つの年齢グループで構成される。4 歳以下の子どもは「TASKA」と呼ばれる保育所¹、5～6 歳の子どもは幼稚園に通う。これらの施設は異なる政府機関の管轄となっている。すなわち、TASKA は女性・家族・地域開発省社会福祉局、幼稚園は教育省の管轄下にある。

カリキュラムに関しては、マレーシアには 0～4 歳児向けの PERMATA と、5～6 歳児向けの NPSC (就学前教育標準カリキュラム) という 2 つのナショナルカリキュラムがある。NPSC は、効果的なコミュニケーション、肯定的な自己概念と自信の育成、クリティカルシンキングと問題解決スキルの促進などの目標を重視している。中でも「個人的能力」の項目では、社会情動的発達、人間関係スキル、リーダーシップに重点を置いている。

マレーシアの幼児教育は、安全で豊かな環境の中で、子どもたちの身体的、感情的、精神的、知的、社会的側面を総合的に発達させることを目指している。カリキュラムでは、楽しく、創造的で、有意義な活動によって、子どものスキルを向上させ、自信や肯定的な自己概念を高め、子どもが困難に対処し、そこから学ぶ力を育むことを重視している。集団活動に適応し、困難に立ち向かい、学習に意欲をもち、将来の教育段階へ円滑に進むことができるよう、自信をもってコミュニケーションをとれる子どもを育てることが求められている。

幼児期におけるレジリエンスと、関連する社会情動的スキルの発達: 5～6 歳児向けの NPSC カリキュラムと 0～4 歳児向けの PERMATA Negara カリキュラムのいずれも、幼児期の発達におけるレジリエンスと社会情動的スキル (SES) の育成を明確に重視している。NPSC では特に、円滑なコミュニケーション、チームワーク、道徳的な行動、共感力などの資質だけでなく、「berdaya tahan (レジリエンス)」の高い子どもを育成することの重要性を強調している。NPSC カリキュラムで定義されている「レジリエンス」とは、子どもが知恵、自信、寛容、共感をもって困難に立ち向かい、乗り越える能力を意味する。

PERMATA Negara カリキュラムでも同様に、自信や自立心などの資質とともに、レジリエンスが高い子どもを育成することの重要性を強調している。PERMATA カリキュラムではレジリエンスを「berjati diri」、すなわち、肯定的な自己概念をもち、新しいことに取り組む意欲があり、リスクを恐れずに挑戦すること、と定義している。これらの定義はいずれも、子どもが勇気、適応力、自信をもって困難、挫折、不確実性を乗り越える能力の育成を重視したものである。

マレーシアでは、レジリエンス育成の要素を幼児教育のカリキュラムに組み込むことで、子どもが幼年期だけでなく学齢期を過ぎても成長するために必要なスキルと思考力を身につけることを目的としている。このホリスティックなアプローチは、認知、感情、社会的側面にわたるレジリエンスの多面的な性質を認識したものである。さらに、子どもが幼い頃からレジリエンスを育むことで、人生の避けられない浮き沈みに対処する準備ができるようにし、健全な適応メカニズムを育て、将来の困難や機会に対してレジリエンスのある視野をもてるようにする。

¹ 訳注: 本稿における「保育所」とは、2～4歳が通う、マレーシアの保育所 (TASKA) であり、日本の保育所とは異なる。

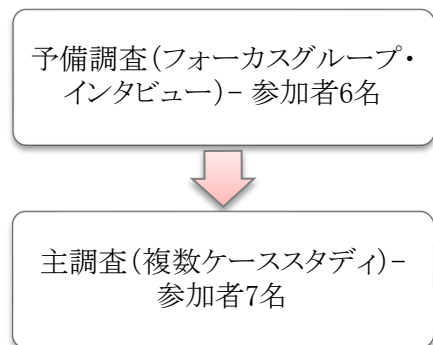
2.0 調査の目的

- (i) 「レジリエンス」と「社会情動的スキル」という用語が、さまざまな幼児教育・保育施設で働く保育者たちにどの程度認知されているかを究明する。
- (ii) 過去数ヵ月の間に、保育者たちが 4～6 歳児のレジリエンスを育み、発達させるために行った取り組みについて調査する。
- (iii) 4～6 歳児のレジリエンスを育成する様々な取り組みをまとめる。

3.0 調査の方法

この質的研究では、複数ケーススタディモデルを採用している。4～6 歳児のレジリエンスと社会情動的スキルの発達に関する問題を保育者の観点から捉え、これらのスキルを育成するために保育者が行っている取り組みや活動について詳しく理解することを意図している。すなわち、単一のケーススタディではなく、複数のケーススタディを用いることにより、異なる種類の幼児教育・保育施設における取り組みの複雑さや有効性を詳しく調査し、調査結果の妥当性と一般化可能性の確保を図った(Yin 2003、Adam 他 2022)。

まず予備調査として複数の幼児教育・保育施設の管理職や運営者とフォーカスグループ・インタビュー(FGI)を行い、次に主調査として主任保育者とのケーススタディインタビュー(CSI)を行った。予備調査は、保育者たちのパフォーマンス、特定の問題や概念に対する彼らの信念、知識、理解、さらには研究テーマに関する彼らの取り組みや考え方について多角的な洞察を得るための強力なツールとなった(Bloor 他、2001)。インタビューは、参加者が母国語で話すことにより効果的に回答・説明できるように、マレー語で実施した(Schembri & Jahić Jašić, 2022)。



この調査を実施するにあたり、異なる種類の幼児教育・保育施設から参加者を募った。FGI で収集した情報は、主調査のケーススタディ・インタビュー(別紙の表 1 と表 2 を参照)に用いる質問を作成するにあたり、非常に有用であった。またマレーシアの異なる幼児教育・保育施設における取り組みや方針を理解する上でも役に立った。

3.1 予備調査(フォーカスグループ・インタビュー)の参加者

予備調査の参加者は、公立と私立の幼児教育・保育施設の管理職／運営者／管理者で構成された(回答者の 1 人は宗教系の幼児教育・保育施設に所属)。参加者は 11～30 年の保育経験を有しており、インタビューの会話でその豊富な知識と専門性が確認された。さらに、参加者の年齢層は 30～60 歳超と幅広く、多様な視野と経験をもっていることが伺われた(表 1)。全体として、このフォーカスグループ・インタビューでは、幼児教育におけるレジリエンスと社会情動的スキルに関するトピックについて包括的かつ多面的な調査を行うことができた。

表 1: フォーカスグループ調査(FGI)の参加者

予備調査(フォーカスグループ・インタビュー)	参加者の属性
参加者の数	6 名
職位	3 名 – 施設運営者／管理職 3 名 – 園長／事務長
施設の種類	2 名 – 公立、4 名 – 私立(1 名 – 宗教系施設)
保育経験	幼児教育を専門職として 11～30 年
性別	1 名 - 男性、5 名 – 女性
回答者の年齢	30～60 歳

3.2 主調査(複数ケーススタディ)の参加者

主調査は 7 件のケーススタディ(7 名の参加者)で構成されており、参加者はすべてマレーシア内に点在する幼児教育・保育施設で働いている主任保育者である。所属施設の内訳は公立が 2 カ所、私立が 4 カ所、うち 1 カ所は宗教系の施設であった。留意すべき点として、参加者全員が女性であり、年齢は 30～60 歳超の広い範囲に及んでいることが挙げられる。この構成から、保育業界の労働力が女性で占められていること、幼児教育分野における幅広い経歴と在職期間を反映して参加者が豊富な経験と視野をもっていることが伺われる。参加者の属性は表 2 にまとめている。

表 2: 主調査(複数ケーススタディインタビュー:CSI)の参加者

主調査(複数ケーススタディインタビュー)	参加者の属性
参加者の数	7 名
職位	7 名 - 主任保育者
施設の種類	1 名 – 国立保育園 1 名 - 国立幼稚園 4 名 - 私立幼稚園 1 名 - 宗教系の私立幼稚園
保育経験	保育者として 11～22 年
性別	7 名 – 女性
参加者の年齢	30～60 歳

4.0 予備調査(フォーカスグループインタビュー)の結果

4.1 「社会情動的スキル(SES)」と「レジリエンス」という用語の認識 - 幼児教育・保育施設の管理職／運営者／管理者の回答

予備調査の回答を分析した結果、社会情動的スキル(SES)とレジリエンスに関し、幼児教育・保育施設の管理職／運営者／管理者の洞察に富んだ見解が明らかになった。社会情動的スキルに関しては、幼児教育コミュニティ内で共有されている知識基盤のおかげで参加者全員がこの用語を包括的

に理解していることが判明した。特に、参加者たちは優れた対人スキル、感情の制御、自信に満ちたコミュニケーション、新しい環境への適応力、他者に対する共感力など、社会情動的スキルが高い子どもに見られる様々な特性を指摘している。彼らの説明は、子どものホリスティックな発達に不可欠な社会的、情動的、行動的コンピテンスを包含する社会情動的スキルの多面的な性質を明示するものである。

対照的に、「レジリエンス」という用語については、予備調査参加者の認識度は2つに分かれ、50%が明確に理解、残りの50%が部分的に理解していることが判明した。さらに参加者は、自園の保育者の大半がこの用語を少しだけ理解しているか、ほとんど知らないのではないかと懸念を述べていた。

4.2 幼児教育・保育施設の管理職／運営者／管理者の認識にバラツキがある「レジリエンス」という言葉の表現を明確化

こうした認識のバラツキはある程度、言語的なニュアンスに起因すると考えられるため、コミュニケーションの明確性と一貫性を確保するために、英語の「レジリエンス」をオリジナルの定義と併せて(主調査のケーススタディ・インタビューに)適用することが提案された。

4.3 「レジリエンスが高い子どもについて -幼児教育・保育施設の管理職／運営者／管理者の回答

「レジリエンス」という用語に対する参加者たちの認識にはバラツキがあったものの、「レジリエンスが高い子ども」の特徴を説明するにあたっては詳細な洞察が示された。彼らはレジリエンスの特徴として、自信、積極的な意見表明、困難と前向きに向き合う気持ち、挫折に直面しても粘り強く取り組む姿勢、問題解決力、包括的な考え方などを挙げている。さらに、レジリエンスが高い子どもは必要に応じて積極的に助けを求めることができ、教育の現場のみならず人生の複雑な状況を切り抜ける粘り強さを発揮すると考えている。

4.4 「レジリエンス」および関連する「社会情動的スキル」を育成する教育プログラムについて - 幼児教育・保育施設の管理職／運営者／管理者の回答

予備調査の参加者たちは、自園の保育者たちが多くの教育プログラムや活動を実践しており、これらは特にレジリエンスや社会情動的スキルの育成を意図したものではないものの、間接的にレジリエンスや社会情動的スキルの発達を支えていると思うと回答した。こうした活動の例として、グループでの問題解決、算数パズル、共同 STEM プロジェクト、創造的な図画工作プロジェクト、ストーリーテリング、ロールプレイ演習などが挙げられた。

4.5 「レジリエンス」および関連する「社会情動的スキル」を育成するために保育者が使用しているアプローチについて - 幼児教育・保育施設の管理職／運営者／管理者の回答

予備調査の参加者は、自園の保育者たちがプロジェクト作業、探究学習、遠足、劇やお遊戯の発表、話し合いなど、本来は学習用に設けられたカリキュラムのアプローチを活用していると述べている。しかし実際には、同じ園の保育者を対象に実施した主調査で収集したデータによると、保育者たちは情動的かつ人道的な方法を用いて子どものレジリエンスと社会情動的スキルを育成していた。

ECEC 施設の管理職／運営者／管理者を対象とした予備調査の結果は、幼児期の発達において社会情動的スキルと共にレジリエンスを育むことの重要性を明示している。社会情動的スキルには基礎的な社会性および情動的コンピテンスが含まれるが、レジリエンスは子どもが逆境を乗り越え、様々な状況で成長していくための重要な適応メカニズムとなっている。レジリエンスを育む戦略を幼児教育カリキュラムや専門能力開発の取り組みに組み込むことで、保育者は子どものホリスティックな成長と発達を支援する環境の土壌をつくることができる。さらに、幼児教育コミュニティ内でレジリエンスの知識を共有することで、子どもたちのためにレジリエンスの高い思考力や行動を育む協働的な取り組みが促進され、生涯にわたるウェルビーイングと成功のための堅固な基盤を築くことになる。

5.0 主調査(複数ケーススタディインタビュー)の結果

幼児教育(ECE)の主任保育者を対象に実施した調査の結果、子どもの社会情動的発達とレジリエンスに関連する様々な側面について貴重な洞察を得ることができた。まず、「社会情動的スキル」と「レジリエンス」という用語の認識については、調査の結果、保育者たちが多様に解釈、理解していることが判明した。さらに、保育者たちがこれらの概念をどこで学んだかについては、正規の研修や保育者研修のワークショップなど、複数の情報源があげられた。さらに調査では、4～6 歳児が直面する困難や逆境について質問し、現場の保育者たちが感じている、子どもの困難について詳細な洞察が示された。子どもが「うまく適応する、立ち直る」ことに関する質問では、子どもの社会情動的ウェルビーイングに対する保育者たちの期待と願望が明らかになった。

また、この調査では、保育者が子どものレジリエンスを育むために保育現場で採用している実践的な戦略として、特定の活動、取り組み、交流も確認することができた。さらに、幼児教育・保育施設でレジリエンスを育むために活用している教育プログラムと教材を調査した結果、子どもの社会情動的発達を支える組織的なアプローチが示された。また、シナリオ設定を用いた質問をし、保育者が様々な困難や逆境に直面している子どもに対してどのように対応するか、そのように対応するのはなぜか、子どもの発達に関する専門知識や理解に基づいて判断した過程など、詳しい回答を収集した。

最後に、レジリエンス評価ツールの使用状況やその内容、子どものレジリエンスに関するフィードバックを保護者にすることについて質問を行い、幼児教育の文脈における生態学的システムの、より外側の輪となる周りのサポートや連携の様子が確認された。全体として、調査の結果、子どもの社会情動的ウェルビーイングとレジリエンスの促進に取り組む保育者たちの考え方、取り組み、戦略に関する価値ある洞察を得ることができた。主調査の回答に基づき主題分析を行い、幼児教育(ECE)のさまざまな側面に対する参加者の視点をまとめた結果、いくつかの重要な課題が明らかになった。これらの課題は調査データから有機的に得たものであり、参加者たちの洞察を包括的に理解できるよう体系的にまとめている。

5.1 社会情動的スキル(SES)とレジリエンス

幼児教育(ECE)の現場における社会情動的スキル(SES)とレジリエンスに関する包括的な調査の過程で、複数のケーススタディの回答に基づき主題分析を行った結果、保育者たちの価値ある視点を確認することができた。参加者たちは、子どもの社会的インタラクションと感情の制御に不可欠な礎となる力である社会情動的スキルについて一貫した理解を示している。また、コミュニケーション力、感情制御、共感力は、社会情動的スキルを育み、子どものホリスティックな発達に不可欠なスキルとして重要であることを強調している。さらに、レジリエンスが高い子どもは、適応力、粘り強さ、前向きな考

え方など、困難を乗り越え、多様な環境で成功するために不可欠な特性を備えていると述べている。幼い頃から社会情動的スキルとレジリエンスを育むことの重要性は、参加者全員が支持していることであり、社会情動的発達が生涯にわたって子どものウェルビーイングと成功に影響を与えることを指摘している。最終的に調査結果をまとめると、教育者と養育者には、子どものレジリエンスを育み、人生の困難を楽観的な思考と強い気持ちで乗り越えるために不可欠な生活スキルを身につけさせるという重要な役割があることが明らかになった。

5.2 社会情動的スキル(SES)の理解

主調査の参加者たちは、社会情動的スキル(SES)が子どもの社会的インタラクションと感情の制御を促進する重要な能力であるという一貫した理解を示している。ケーススタディ 1(CS-1)、ケーススタディ 4(CS-4)、ケーススタディ 7(CS-7)の回答者は、子どもが社会情動的スキルによって人間関係を築き、共有し、新しい状況に上手く適応できるようになると述べている。同様に、CS-2 と CS-3 の回答者は、他者とのコミュニケーションにおける社会情動的スキルの重要性を詳細に述べ、他者の気持ちを理解し、自分の考えを明確に表現する際に果たす社会情動的スキルの役割を重視している(図1)。保育者たちは全員一致で、子どもが人間関係を円滑に構築し、情動面のウェルビーイングを育むために、社会情動的スキルが不可欠な礎となる力であることを認めている。図 1 は、保育者たちが社会情動的スキル(SES)という用語をどのように理解しているかについて回答した内容を抽出したものである。

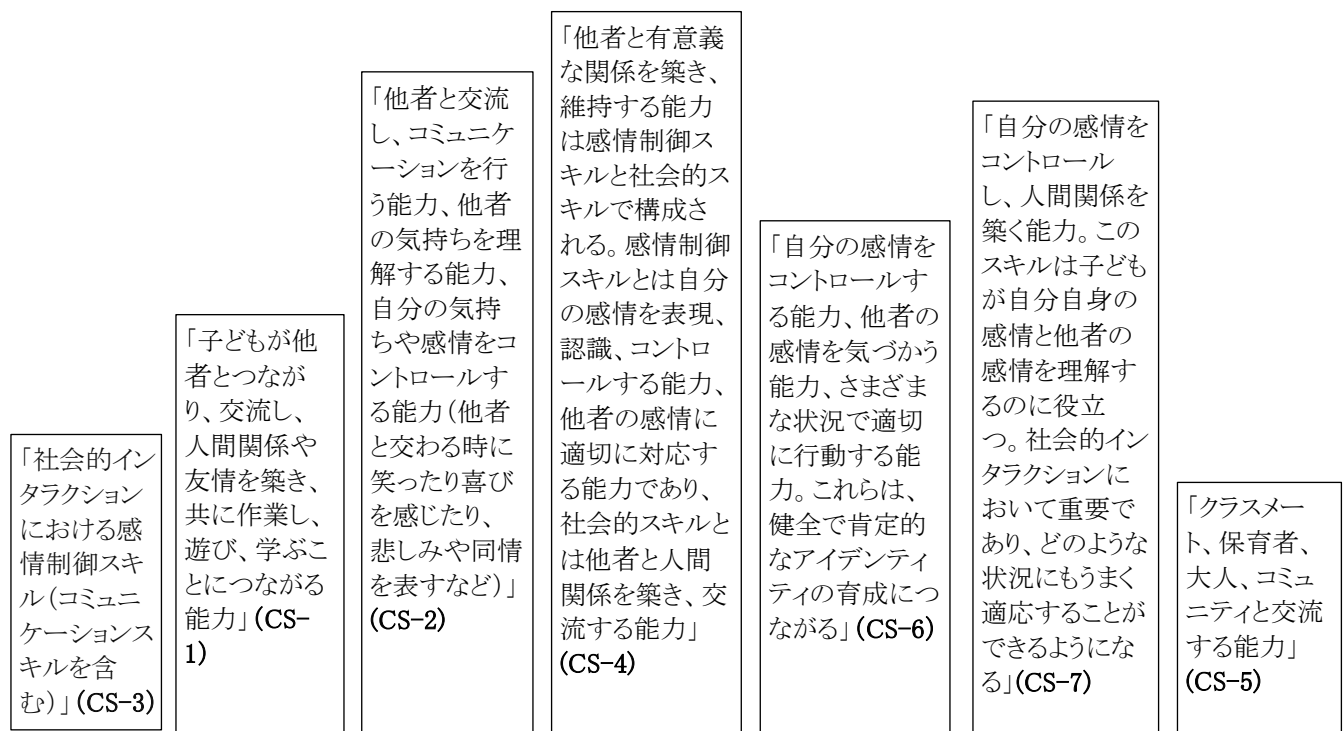


図 1: 「社会情動的スキル(SES)」という用語に対する保育者たちの認識

5.2.1 マレーシアの子どもに必要なと思われる重要な社会情動的スキル(SES)

参加者たちは、社会情動的スキルの領域において、子どもの発達に不可欠なコンピテンスとしてコミュニケーションと感情制御の重要性を指摘している。例えば、ケーススタディ 3 (CS-3) の回答者は明確な表現と礼儀正しい返答の重要性を、CS-6 の回答者は情動的スキルと社会的スキルの相互作用を、人間関係の構築においてはコミュニケーション力の重要性を強調している。また、CS-2 と CS-7 の回答者は、自分の感情を理解してコントロールする上で感情制御スキルが果たす重要な役割を指摘しており、社会的インタラクションと心理的なウェルビーイングに大きな影響を与えることを示唆している(図 2)。

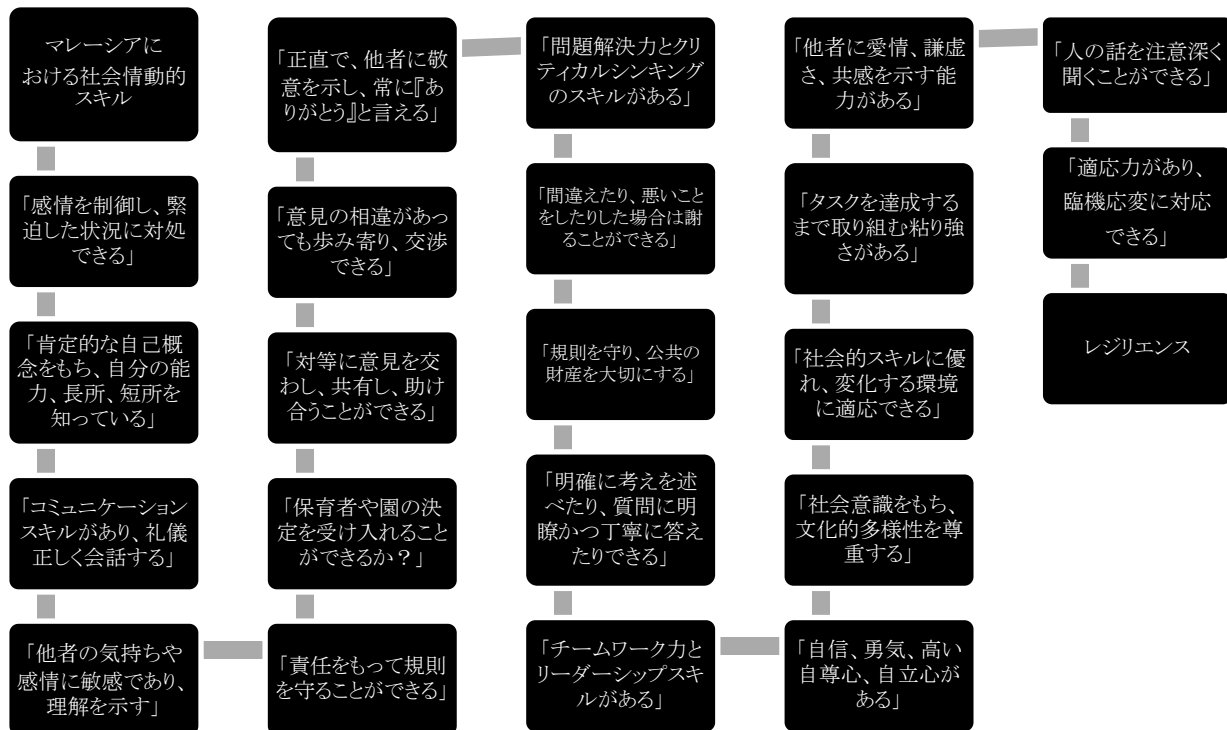


図 2: 保育者たちが考える「子どもにとって重要な社会情動的スキル」

主調査の参加者が最も頻繁に言及した社会情動的スキルは、コミュニケーションスキル、感情の自己制御、社会意識、チームワークスキル、クリティカルシンキング／問題解決スキル、レジリエンス、勤勉さであった。これらのほとんどは、幼児教育カリキュラムに定められている「ソフトスキル」であり、保育者が育成し、子どもが発達の節目に応じて適切に習得するものとされている。予備調査の参加者と保育者たちは、将来マレーシアの労働力となる子どもたちが習得すべき最も重要な社会情動的スキルについてよく理解しており、皆統一された考えをもっていることが伺われた。

CS-7 の回答者は次のように述べている。「これらのスキルは園での生活のために習得するのみではなく、生涯にわたって必要とされるスキルだと思います。子どもたちが自分の感情をコントロールする方法や他者と付き合う方法を学ぶことは、学校やその後の人生で成功する準備をしているようなものです。その先に降りかかるあらゆる出来事に立ち向かうために必要な自信とツールを得て、将来の成功と幸せの土台を築くことなのです。私の観察したところでは、子どもたちは、自信をもち、尊重され、支えられていると感じると、より学びに取り組み、概して楽しそうにしています」

5.2.2 社会情動的スキル(SES)が高い子どもの特徴

参加者たちは、社会情動的スキルが高い子どもの特徴として、社交性や情動知能に寄与する明確な特性を挙げている。表 3 は、7 件のケーススタディ・インタビューから得た回答をまとめたものである。これを見ると、参加者全員が優れた社会情動的スキルをもつ子どもの特性を適切に挙げることができた。これらの保育者たちが「社会情動的スキル」という用語を非常によく理解していることは興味深い。例えば、CS-5 の回答者によると、社会情動的スキルが高い子どもは簡単に友達を作ることができ、他者を尊重でき、自分自身の問題や他者との対立を解決できる社交的な個人として描写されている。同様に、CS-1、CS-5、CS-6、CS-7 の回答者は、社会情動的スキルが高い子どもの特性として、社会性、責任感、礼儀正しさ、共感力、協力的な態度を挙げ、肯定的な人間関係と支えのある環境を育む上での情動知能の重要性を強調している。

5.2.3 子どもの社会情動的スキルを育む大切さ

表 3 を見ると、主調査の参加者全員が子どものホリスティックな発達に及ぼす社会情動的スキルの重大な影響を認識していることが分かる。彼らは一貫して社会情動的スキルの早期育成を重視している。CS-4 の回答者は、社会情動的スキルが、子どもの人格、学業成績、全体的なウェルビーイングの形成において極めて重要な役割を果たすことを指摘している。同様に、CS-7 の回答者は生涯にわたる社会情動的スキルの発達の重要性を強調し、子どもの人生の様々な場面において成功をもたらす要因であると述べている。これらの観点は、子どもの肯定的な社会情動的発達を促進し、基本的な生活スキルを身につけさせるためには、早期介入とサポートが極めて重要であることを浮き彫りにしている。

表 3: 社会情動的スキル(SES)が高い子どもの特徴

CS-1	CS-2	CS-3	CS-4	CS-5	CS-6	CS-7
- 自己制御&緊迫した状況に対処できる - 肯定的な自己概念と自信がある - 粘り強さと忍耐力がある - レジリエンスが高い - 礼儀正しい - 注意深く人の話を聞く - 社交性がある - 共感を示す - 寛容を示す - 責任感がある - 正直である - 人に敬意を払う - 協力する - 規則を守る	- 感情をコントロールできる - 他者を尊重する - 友達が多い - 誰とでも友達になれる - チームプレーヤーである - 共感力がある - 勤勉である - 学ぶ意欲がある - 責任感がある - 規則を守る - 困難に直面してもパニックにならない - 明るい - 新しいことに楽しそうに挑戦する - マナーが良い - 順番を待てる	- 感情をコントロールでき、他者の感情に敏感である - 喜んで他者を助ける - 共感力や思いやりがある - 礼儀正しいコミュニケーションをとる - 友達を作るのが上手く、友達が多い - 感じがよく、おおらかな性格である - リーダーシップを発揮できる - 決断力がある - 責任感がある - 楽観的である - 心が広い	- 穏やかで、明るく、フレンドリーである - 成績が良い - スポーツや芸術などの課外活動に進んで参加する - 日々の学習を上手く管理している - リーダーシップを発揮している - 責任感がある	- 友達や親友が多い - 他者と簡単につながる - 自分自身の問題や他者との対立を解決できる - 園の規則に従うことができる - 自立心がある - 協力的である - 他者の感情に気づき、適切に対応できる - 保育者、保護者、年長者に敬意を払う - 礼儀正しく責任感がある	- 友達が多い - コミュニケーション力が高い - 幸せで明るく、自尊心が高い - リーダーシップを発揮できる - 責任感がある - 交渉スキルが高い - ストレス、不安、失敗に対処し、適応できる(レジリエンスが高い) - 協力的・協調的である - 共感力がある - 他者との対立を解決できる - リスクを恐れずに挑戦する	- 自信をもち、心優しい - 協力的・協調的である - 親切で思いやりがある - 注意深い - 共感力がある - 問題解決力や学習力が高い - 創造力を発揮して問題や他者との対立を解決する - 教室で良い影響を与える(学習面で問題を抱えるクラスメートを進んで助ける) - 礼儀正しく、行儀が良い

5.3 社会情動的スキルの一部であるレジリエンス

調査の回答を分析した結果、「レジリエンス」が社会情動的スキルの土台であり、子どもが困難や挫折を楽観的かつ断固として乗り越えるために不可欠であり、障害物を上手く乗り越えるための基本的な資質として受け止められていることが判明した。CS-1 の回答者は、社会情動的スキルの一部として「粘り強さと忍耐力」を挙げている。同様に、CS-2 の回答者は社会情動的スキルを「困難に直面してもパニックにならない」、CS-6 の回答者は「ストレス、不安、失敗に対処し、適応できる」と描写しており、否定的な社会的行動に対する緩和要因および適応的な対処行動を促進する要因と捉えていた。これらの洞察は、「レジリエンス」が社会情動的スキルの不可欠な要素であり、逆境に適応する力と困難に粘り強く取り組む力を育む大切さを強調している。

参加者たちの社会情動的スキルに対する視点を知ることによって、その多面的な性質が明らかになり、子どもの発達とウェルビーイングに及ぼす重大な影響がはっきりとした。

5.3.1 レジリエンスの理解

ケーススタディの参加者たちの「レジリエンス」という用語の理解度は様々であったが、困難を乗り越えるためのレジリエンスの重要性については意見が一致していた。ケーススタディ 1(CS-1)の回答者は、当初レジリエンスを大人のスキルとして関連付けていたが、後に理解を深め、レジリエンスは子どものスキルでもあり、問題や困難を乗り越える能力と定義している。同様に、CS-2 の回答者は、レジリエンスが逆境に直面した時の粘り強さであるという認識から、レジリエンスを「強靱さ」や「決断力」と同等にみなしていた。こうした解釈は、レジリエンスが問題解決力や強靱な精神力を含む多面的な概念であることを強調している。また、CS-7 の回答者は、レジリエンスを困難な状況でも強く前向きな姿勢を保つ力であり、人生の困難を乗り越えるためのレジリエンスの重要性を指摘していた。

5.3.2 レジリエンスが高い子どもの特徴

ケーススタディの参加者たちは、レジリエンスの高い子どもの特徴として、適応力、粘り強さ、前向きな考え方を挙げていた。例えば、CS-3 の回答者は、問題に冷静に対処し、自力で、または他者の助けを借りて解決策を探す子どもは、高いレジリエンスをもっていると述べている。同様に、CS-6 の回答者は、決して諦めない姿勢がレジリエンスであるとして、自信、創造的な問題解決、情動的なレジリエンスなどの資質を指摘している。特に、CS-5 の回答者は、レジリエンスを、障害を乗り越える子どもの原動力となる永続的な資質であるとみなし、不屈の精神と粘り強さを維持する大切さを重視している。

5.3.3 レジリエンスを育む大切さ

参加者たちは皆、子どもの全人的な発達と将来の成功を促進する上でレジリエンスが重要な役割を果たしていることを認識しており、レジリエンスの育成を重視していた。CS-1 の回答者は、教育の現場で幼い頃からレジリエンスを育成することの重要性を指摘しており、子どもの社会情動的ウェルビーイングに長期的な恩恵をもたらすと述べた。同様に、CS-4 の回答者は、幼稚園教育におけるレジリエンスの不可欠な役割を強調し、レジリエンス育成の不可欠な要素として自立心と感情制御を指摘している。さらに、CS-7 の回答者は、生涯にわたるレジリエンスの重要性を主張し、子どもが学校やその後の人生で成功するためにもレジリエンスの育成が必要だと述べている。また、これらの洞察は全て、子どものレジリエンスを育成し、多様な環境で成功するためのスキルを身につけさせるには、早期の介入が極めて重要であることを強調している。

端的に言えば、分析結果から、参加者たちの間でレジリエンスに対する理解の微妙な差異が明らかになり、レジリエンスの多面的な性質と子どもの発達への影響が浮き彫りになった。レジリエンスの解釈は様々であったが、子どものウェルビーイングと適応力を促進する上でのレジリエンスの重要性については意見が一致していた。また、レジリエンスが高い子どもの特徴として、自信をもち、機知に富み、情動知能が高く、逆境に直面しても乗り越える力がある子どもが挙げられた。調査の結果から、教育者や保育者が、支えのある環境、肯定的な励まし、スキル育成につながる介入を通じてレジリエンスを育む重要性が浮き彫りとなった。

5.4 保育者たちの視点から「社会情動的スキル」と「レジリエンス」を捉える

保育者は子どもの「社会情動的スキル(SES)」と「レジリエンス」を見だし、育成する上で極めて重要な役割を果たす。保育者の立場からすれば、これらの概念の起源を理解することは必要不可欠であ

る。インタビューを受けた保育者たちは、保育学などの学問的な研修、専門能力開発のワークショップ、カリキュラムガイドライン、教育現場における個人的な経験など、多様な情報源を活用していると答えている。こうした様々な経路を通じて、子どものホリスティックな発達における社会情動的スキルとレジリエンスの重要性について理解を深めている。彼らは、社会情動的コンピテンスとレジリエンス育成の方法の相互的な関連性を認識しており、これらのスキルが子どものウェルビーイングと将来の成功に及ぼす重大な影響を認めている。保育者たちは効果的な教育アプローチを継続的に探求し、適用することで、社会情動的スキルとレジリエンスの発達を促進する環境を育み、子どもが自信と適応力をもって人生の困難を乗り越える土台を築けるように努めていることが分かった。

表 5: 保育者たちは社会情動的スキルとレジリエンスをどこで学んだか

CS-1	CS-2	CS-3	CS-4	CS-5	CS-6	CS-7
- 大学／大学院の幼児教育課程 - 就学前教育カリキュラム(教育省による就学前教育ナショナル標準カリキュラムの説明／PERMATA カリキュラム)。 - 専門能力開発コース／研修(ワークショップ) - セミナー／ウェビナー／カンファレンス - 新任保育者向け幼児教育課程のトレーナーとして自分で勉強した	- 大学の幼児教育課程 - ワークショップ／セミナー - 幼児教育カリキュラム(PERMATA／NPSC)	- 大学課程 - 専門能力開発研修／ワークショップ - セミナー／カンファレンス - 施設管理職とのミーティング - 本を読んで知識を得た - 園の訪問者や保護者向けのレポートやプレゼンテーションを準備する必要があった時に自分で調べて勉強した	- 大学の幼児教育課程 - 研修／ワークショップ - セミナー／カンファレンス - 他の保育者、保護者、地域との話し合い	- 大学の幼児教育課程 - 研修／ワークショップ - セミナー／カンファレンス - 他の保育者、保護者、地域との話し合い - 教育省による継続的な説明会とプレゼンテーション(カリキュラム、評価プロセス、データ入力システムなど)	- モンテッソーリ教員研修プログラム(モンテッソーリ認定) - 就学前教育カリキュラム(就学前教育ナショナル標準カリキュラム／PERMATA カリキュラム) - 専門能力開発コース／ワークショップ - ウェビナー／カンファレンス、専門家との交流 - 本を読んで知識を得た - ガイドラインや保護者向けレポートの作成、幼稚園のウェブサイトやFacebookでの情報提供のために自分で調べて勉強した	- 大学の幼児教育課程 - 専門能力開発研修／ワークショップ - セミナー／カンファレンス - 施設管理職とのミーティング - 新任保育者や研修生の研修を実施する前に自分で本を読んで勉強した - 管理計画チームとの話し合いや関与。 - 専門家との会議

CS-1、CS-5、CS-6 の回答者は、「社会情動的スキル」という言葉について初めて学んだのは教育法や就学前教育ナショナル標準カリキュラムに関する教育省主催のコースや説明会だと答えている。一方、「レジリエンス」という言葉に出会ったのはこの調査が初めてだと述べている。CS-5 の回答者は、マレー語の「berdaya tahan」の方が馴染み深いと述べている。このマレー語の言葉は「精神力と前向き

な考え方をもつこと」を意味する。彼女は「berdaya tahan」が「レジリエンス」の正確な翻訳であると考え、この 2 つの用語を混同していた。「レジリエンスとは、子どもの強さと自信を育むことだと思っていました」と説明している。

CS-6 の回答者は、「社会情動的スキル」と「レジリエンス」について最初にどのように学んだかと尋ねられたとき、「私はこの 2 つの用語についてよく知っています。かなり昔にモンテッソーリコースと大学の課程で学んだからです。また、モンテッソーリプログラムやマレーシアの幼児教育カリキュラムの実施と評価に関するセミナーや研修ワークショップに時々参加したり、自分で本を読んだりして学ぶこともあります。私は 2020 年に幼児教育学に関する本を執筆したこともあり、また、自園の Facebook で、社会情動的スキルとレジリエンスの側面に触れながら、保護者に対する子どもの保育、成長、発達に関するアドバイスを週ベースで投稿しています」と答えている。

CS-7 の回答者は、「私は幼児教育の分野でキャリアをスタートさせて以来、数多くの幼児教育コースに参加して、この 2 つの用語について学びました。社会情動的スキルとレジリエンスは、PERMATA カリキュラム(0～4 歳児)と就学前教育ナショナルカリキュラム(5～6 歳児)で最も重点を置かれている項目であるため、保育者は必ずこの 2 つの用語について十分に理解しておく必要があります」と述べている。

さらに、ケーススタディの記録に基づき主題分析を行い、幼児教育のさまざまな側面に対する参加者の視点をまとめた結果、いくつかの重要な課題が明らかになった。これらの課題は調査データから有機的に得たものであり、参加者の洞察を包括的に理解できるように体系的にまとめている。

● 研修と専門能力開発

この質的研究の参加者たちは、幼児教育(ECE)における社会情動的スキル(SES)とレジリエンスを理解するための主な情報源として、保育学などの学問的な研修と専門能力開発を挙げている。CS-2、CS-3、CS-4 の回答者は、大学の幼児教育課程でこれらの概念をどのように学んだかを説明している。これは CS-6 の回答者も同様で、社会情動的スキルとレジリエンスについてよく理解しているのは、モンテッソーリコースや大学の教育課程など、自分の広範な学歴によるものだと答えている。CS-7 の回答者も同じく、社会情動的スキルとレジリエンスに関する知識を深める上で、幼児教育課程を通じた継続的な専門能力開発の重要性を強調している。こうした調査結果により、保育者が子どもの社会情動的発達を促進するために必要な知識とスキルを身につけるには、保育学などの学問的な研修が必要不可欠な役割を果たすことが明らかになった。

さらに参加者たちは、社会情動的スキルとレジリエンスの理解を深める上で、ワークショップ、セミナー、研修コースなどの継続的な専門能力開発の機会が重要であることを指摘している。CS-2 の回答者は、保育施設で 12 年間勤めている間に、さまざまなワークショップやセミナーに参加し、社会情動的スキルに関する知識を深めたと説明している。同様に、CS-4 の回答者は、子どもの社会性と情動の学習と人格形成に関する理解を深める上で、研修コース、ワークショップ、セミナー、カンファレンスに参加することの価値を主張している。この継続的な学習を重視する姿勢は、幼児教育の動的な性質と社会情動的発達への理解の進化を反映している。

また、主調査の分析結果により、カリキュラムフレームワークにおいて社会情動的スキルとレジリエンスを比較した場合、レジリエンスの重視度に差異があることも明らかになった。CS-1 の回答者が述べたように、カリキュラムでは社会情動的スキルが繰り返し強調されている一方で、レジリエンスは注目度が低いように見受けられた。ただし、参加者たちは、子どものホリスティックな発達を促進する上で両方の概念が重要であることを認識している。CS-5 の回答者は、マレーシアの就学前教育カリキュラム

における社会情動的スキルの重要な役割を強調する一方で、用語の解釈は異なるもののレジリエンスの重要性も認めている。こうした差異があることから、包括的な社会情動的発達を促進するには、幼児教育カリキュラムフレームワークにおいて、レジリエンスの概念に対する意識を高め、その重要性をカリキュラムに反映する必要があることが明らかになった。

主題分析の結果から、保育者たちの社会情動的スキルとレジリエンスへの理解を促進するには、保育学などの学問的な研修と継続的な専門能力開発が重要な役割を果たしていることが明らかになった。保育者たちは、様々な情報源や経験から洞察を引き出すことで、子どもの社会情動的発達とレジリエンスの育成を効果的に行うことができる。そして、最終的には子どもの全体的なウェルビーイングや成功に寄与することが期待される。

● 文化的小および言語的な視点

この質的研究で得た別の重要な課題として、文化的小および言語的な視点が幼児教育（ECE）における社会情動的スキル（SES）とレジリエンスの理解に及ぼす影響が挙げられる。主調査の参加者たちは、様々な状況において社会情動的スキルとレジリエンスを促進する戦略を定義し、実行する際に、文化的小および言語的な考慮が重要であることを強調している。

例えば、CS-1 の回答者は、マレーシアの文化圏内でレジリエンスを伝えるためにマレー語の「berdaya tahan」という用語を使用することについて述べている。この言語的なニュアンスは、知恵、信念、寛容、共感などの文化的価値を反映しており、現地でレジリエンスを理解してもらうには必要不可欠なものである。同様に、CS-5 の回答者も、マレーシアの就学前教育カリキュラムにおける社会情動的スキルの文化的小の重要性を指摘し、カリキュラムの開発と導入において文化的小の感受性が必要であることを強調している。

さらに、参加者たちは、文化的小の慣習や信念が子どもの社会情動的発達とレジリエンスの形成に果たす役割を指摘している。例えば、CS-7 の回答者は、子どものレジリエンスを育むために、幼児教育に文化的小の価値観や伝統を組み込むことを重視していた。このことは、多文化教育の学者が提唱しているように、文化は子どもの発達と学習の基本的な側面であるという幅広い認識と合致している。

また、マレーシアの多様な言語的背景を反映し、社会情動的スキルとレジリエンスを定義する際に言語的なニュアンスが存在することが、主調査全体で明らかになった。参加者たちは、これらの概念をさまざまな言語的背景をもつ子どもや保護者に伝える際には、言葉の明瞭性と正確性が重要になると述べている。このことは、すべての関係者の間で効果的なコミュニケーションが取られ、理解がされるよう、幼児教育の現場において文化的小および言語的な配慮を意識した保育実践が必要であることを浮き彫りにしている。

主題分析の結果から、幼児教育における社会情動的スキルとレジリエンスの理解と実行を促進する上で、文化的小および言語的な視点が重要であることが明らかになった。保育者は、多様な文化的小および言語的な視点を認識し、反映することで、すべての子どもの社会情動的発達とレジリエンスを支援する包括的かつ文化的小に配慮した学習環境を構築することができる。

5.5 子どもが直面する困難や逆境

保育者たちに、4～6 歳児が直面する「困難」や「逆境」について尋ねたところ、以下の回答が得られた。

(1) 発達に関する困難:

- 園の新しい環境に適応するのが難しい
- 園に行くのを嫌がる、日常生活を手伝ってもらうのに親がいないと不安になる
- 園で出される食べ物、飲み物、野菜の食事を嫌がる
- 行動上の問題:衝動的な行動、多動症、喧嘩、いじめ、かんしゃく、パニックに陥る
- 学習上の困難:言葉の遅れ、読み書きなどの基本的なスキルの欠如、集中できない、コミュニケーションの問題があるなど
- 人間関係の問題:過度に消極的、内気、仲間から孤立、自尊心が低い、グループ活動が難しいなど
- 情動的な問題:悲しみとストレス(親の期待が高いため)、過度に依存的、過度に敏感
- その他の発達の問題:4 歳になっても哺乳瓶から飲みたがる、家庭でのトイレトレーニングがうまくいかず、4 歳になってもおむつをつけて通園

(2) 家庭や家族に起こった悲惨な出来事に関連する逆境やトラウマ:

- 両親の別居や離婚
- 近い人との死別
- 父親の不在(薬物更生施設に収容されているため)
- 家族の交通事故

5.6 4～6 歳児のレジリエンスを育む取り組み

子どものレジリエンスを育むには、共感的、適応的、ホリスティック、統合的、協力的な方法など、様々なアプローチと取り組みが必要となる。こうした多様なアプローチは、子どものホリスティックな発達を総合的に支援し、子どもが自信と適応力をもって人生の困難を乗り越える土台を築けるようにするものである。さらに、保育者は子どものレジリエンスを育むために、発達的かつホリスティックな保育プログラムも計画する。

5.6.1 共感的なアプローチと適応重視のアプローチ

参加者たちが子どものレジリエンスを育むために使用している方法は、共感的なアプローチと適応重視のアプローチを組み合わせたものだった。共感的なアプローチの例としては、ピアサポート、子ども一人一人にあわせた励まし、包括的なクラス活動が挙げられ、いずれも社会情動的スキルの発達を促す。一方、適応重視のアプローチは、困難な状況で獲得した能力を認識し、活用するものである。保育者たちは、ペア学習、子ども一人一人のニーズへの思いやりのある対応、グループプロジェクトを介した共感力の育成など、子どもの生来のレジリエンスを効果的に活かすことができるような戦略を実施している。さらに、保護者や専門家と連携することで包括的なサポートが可能になり、全体的な成長を重視しつつ、子どもの生来の能力を活かせるような教育を促進することができる。

・ピアサポートと統合

CS-1、CS-2、CS-4 の回答者は、子どもの共感力や仲間と助け合う力を育むために、注意深く耳を傾けることを重視し、うまく皆についていけない子どもを、何でもこなしている子どもとペアにして、子どもたちのインクルーシブな交流を促していると答えている。こうした取り組みは、共感力と適応力がレジリエンスを育む上で、いかに重要な役割を果たしているかを示す例である。例えば、CS-1 の回答者は、「行動の遅い」または「内気／悲しそうな」子どもをクラスで「最も優秀な」子どもとペアにするなど、子ども一人一人のニーズに応じて、理解と育成(子どもが子どもに教えること)を促進させるような育成環境を提供している。保育者は、自己肯定感のある子どもの生来のレジリエンスを効果的に活用し、苦戦して奮闘している子どもの情動的な発達を支援するよう、各子どもペアの動態に合わせた指導を行うことができる。

・子ども一人一人に合わせたサポートと励まし

CS-1 と CS-2 の回答者は、思いやりをもって個々のニーズに対応することの重要性を強調し、コミュニケーションに難がある子どものために座席の配置を調整したり、発話に苦労している子どものために対面セッションを設けたりするなど、子ども一人一人に注意を向け、励ますようにしていると述べている。子ども一人一人の問題や強みに合わせて継続的に励まし、褒めることで、子どものスキルと自信は大幅に向上する。保育者たちは、潜在的な障害物をレジリエンスの発揮や進歩の機会と捉え、それぞれの子どもの変わりゆくニーズに合わせて継続的にアプローチを調整している。

・共感力を育むクラス活動

CS-1、CS-2、CS-4 の回答者は、「シェア&テル(いわゆるショウ&テル)」セッション、読書セッション、グループプロジェクトなどのクラス活動が、お互いの尊重、共感力、協力的な問題解決力を育むと述べている。また、CS-4 の回答者は、コミュニケーションや積極的に耳を傾けることに重点を置くことで、子どもたちの問題に対処するだけでなく、子ども同士の協力や共感を促進すると指摘している。

・保護者の協力

CS-2 と CS-4 の回答者によると、保護者と保育者がパートナーとして協力しあうことで、子どもの自信を高め、新しいことに挑戦するよう促し、粘り強さを褒め、やる気を起こさせ、努力させることが容易になる。

5.6.2 ホリスティックな教育アプローチ

プロジェクトアプローチを導入することは、子どもを協同的な問題解決に取り組ませ、自信を育み、適応力を養い、レジリエンスと社会情動的スキル(SES)を育むことにつながる。さらに、「ホリスティックな日常ルーティンアプローチ」を適用すると、子どもの自立心、自制心、帰属意識を促進する整ったルーティンを重視することになる。。規則正しいスケジュールで動く、子どもの自立心、自制心、帰属意識を維持するのに役立つ。

・PBL(課題解決型学習／プロジェクト保育)

CS-3 と CS-5 の回答者が示したプロジェクトアプローチは、子どもたちがグループで問題を解決することにより協調性、自信、適応力を伸ばすことで、子どものレジリエンスと社会情動的スキルを育むものである。例えば、CS-3 の回答者は、子どもたちが自然観察日記プロジェクトを介して観察スキルを向上させるだけでなく、帰属意識や共感力も育むと述べている。

5.6.3 統合的かつ協調的なアプローチ

レジリエンスを育むための統合的かつ協調的なアプローチをとることにより、安心してやる気が起きる学びの環境を構築し、思いやりやレジリエンスを促進する行動を促すことができる。

● 安心と助けが得られる学びの環境の構築

CS-5 と CS-7 の回答者は、子どものレジリエンスを育むために、自分が認められ、支えられていると感じられ、安心できる環境を作ることを重視している。保育者は、レジリエンスのある行動をモデル化し、思いやりがあり支え合う環境を作ることで、子どもの自信と柔軟性の基盤を築く。これにより、子どもの自信と柔軟性を伸ばすことができる。

CS-7 の回答者は社会性と情動の学習 (SEL) を取り入れること、CS-5 の回答者はリーダーの役割をローテーションでやらせることを述べているが、こうしたアプローチはレジリエンスの育成を日常的な交流や活動に根付かせる戦略と言える。こうした戦略は、子どもたちのチームワーク、助け合い精神、自信を伸ばすことになり、子どものレジリエンスと社会情動的スキルの発達が促される。統合的アプローチは、レジリエンスの育成を日常的な交流に組み入れることにより、子どもたちが互いに協力し、支え合う力を伸ばせるようにする。

CS-6 の回答者は、イスラムの教義とモンテッソーリ手法を統合させることにより、園の方針を遵守させる一方で、協調的な学習、個人の責任、倫理的な指導を通じて、レジリエンスと社会情動的スキルを育成すると述べている。これらの能力は、STEM プロジェクトなどの教育的な取り組みによってさらに強化される。イスラム教の信仰とモンテッソーリ教育の原則を融合させることで、子どもの全体的な発達を促す包括的な学び環境が確立される。

5.6.4 ホリスティックおよび発達を促すプログラム

CS-1 から CS-7 の回答者たちは、保育プログラムにおいて、子どものレジリエンスのみならず社会情動的スキル (SES) を育む様々な活動を実施していると答えている。

身体重視のプログラムは、身体協応性や運動の協調性などの身体活動を促進する。子どもは鍛錬や粘り強さの価値を学ぶ過程で、レジリエンスや決断力を身につける。同様に、子どもは、木のぼりや橋づくりなど安全かつ失敗の可能性がある活動に取り組むことで、快適ゾーンから抜け出して冒険し、困難に対処し、挫折から教訓を得ることができ、こうした発達過程に伴いレジリエンスが養われる。また、ゲームやスポーツに参加することで、子どもたちは競争、協力、スポーツマンシップに関する貴重な教訓を得て、仲間との協力やコミュニケーションスキルを向上させる一方で、成功と失敗の両方を乗り越えるレジリエンスを身につけることができる。

子どもたちが一緒に本を読む時間など、読み書き重視のプログラムは、読み書きのスキルと社会情動的発達の両方を育む上で重要な役割を果たす。子どもたちはグループ読書セッションに参加することで、言語能力を向上させるだけでなく、自分の考えを表現し、他者の話に耳を傾け、異なる考え方に共感することを学ぶ。これにより、社交性や情動知能の発達が促される。

課題解決型の保育と学習戦略 (STEM など) を活用することで、子どもたちがチームで作業し、責任を共有し、友情を築くスキルを促進することができる。また、協働プロジェクトに参加することで、レジリエ

ンスと社会情動的スキルの育成に不可欠な問題解決力、適応力、コミュニケーション力を身につけることができる。

さらに、休暇期間中のアクティビティ、文化的なパフォーマンス、保護者のパートナーシップグループなどのイベントは、コミュニティ・エンゲージメント、帰属意識、ソーシャルサポートネットワークを育成する。これらはすべて、子どものレジリエンスと社会情動的スキルを育む上で重要な役割を果たす。これらの多様なプログラムや活動によって、子どもが学科的な知識を習得するだけでなく、自信とレジリエンスをもって人生の困難を乗り越えるために必要な社会的、感情的、行動的コンピテンスの発達を促すホリスティックな学びの環境を構築することができる。

主調査の結果は、保育者がどのようにレジリエンスを育てているかを示しており、重要なアプローチや包括的な発達を促すプログラムを取り入れていることが明らかになった。こうした保育者たちの取り組みは、子どもたちが学力や社会情動的スキルを高め、レジリエンスを育み、自信と適応力をもって人生の困難に立ち向かう力を身につけさせるものである。

5.7 シナリオ設定において保育者が推奨する行動とその根拠

シナリオ 1: 友だちから仲間外れにされた(仲間に入れてもらえなかった)

CS-1: このシナリオで保育者としてどう関わるか: その子に話しかけて、なぜグループに入りたくないのか話すように促し、その気持ちを受け止めるようにする。そして、その子の悩みをクラスの皆に話してもよいか尋ねる。クラスの皆に「神は人を助ける者を愛する。私たちはお互いに思いやりをもたなくてはならない」という宗教的な助言を伝え、皆でその子を友だちとして助けまいかと問いかける。

このアプローチを選んだのはなぜか: これは感情と学びの問題であるため、最善のアプローチは、思いやりと共感を示し、その子が皆と同じように基本的なスキルを身につけるまで助けてあげようとクラスメートに問いかけることだと思う。また、宗教上の助言は、思いやりのあるクラスを育てるのに非常に効果的だと考えている。

CS-3: このシナリオで保育者としてどう関わるか: ここでは、ひとりっ子のため社交性が未熟な子どもの例を取り上げる。その子は幼稚園に入園したばかりだったので、私はクラス全員にその子を紹介し、友達になりたい子はいないか尋ねた。多くの子どもたちが手を挙げた。私はクラスで最も人気のある2人を選び、その子の「世話係」になってもらい、幼稚園の生活やルールに従う方法や学習活動に参加する方法を教えるよう頼んだ。

このアプローチを選んだのはなぜか: 親に依存している子どもは園で助けが得られないと感じやすく、全般的な不安やストレスにつながる可能性がある。そのような子に自立心をもたせるためには、まず自信をもたせるようにする必要がある。「世話係」たちはその子を遊びのグループに迎え入れ、活動を通じて教えたり手助けしたりする役割を担う。このアプローチにより、その子はクラスメートと話すようになり、友達を作ることができるようになった。

CS-4: このシナリオで保育者としてどう関わるか: まず、その子と友達になり、クラスに紹介して、握手や伝統的な挨拶(アサラーム・アライクム)などで互いの自己紹介を促す。皆で仲良くすることの大切さ、誰も仲間外れや独りぼっちにしてはいけないことをはっきりと伝える。

このアプローチを選んだのはなぜか：「思いやりとインクルーシブ」なアプローチを用いて仲間外れを防止し、同時にその子の社交スキル、レジリエンス、帰属意識を育みたいと考えた。

CS-5: このシナリオで保育者としてどう関わるか：「ひとりぼっちになりがちな子ども」を、社会情動的スキルとレジリエンスが高い子ども（通常、より成熟度が高く、数ヵ月年上で、好ましい学力を示す）1人か2人とペアにして、その子を助け、導いてもらうようにする。

このアプローチを選んだのはなぜか： これまでにも、このアプローチが奏功し、多くの「ひとりぼっちになりがちな子ども」が自信をもち、あまり内気ではなくなり、グループ活動に参加するようになるのを見てきた。私は、子どもが幼いうちから保育園や幼稚園で仲間と良好な関係を築き、社会情動的スキル、自信、共感力を身につけ、自分に対する肯定的なイメージをもてるようにガイドされ、教えを受ける必要があると考えている。

CS-7: このシナリオで保育者としてどう関わるか： 仲間はずれにされた子どもに共感と理解をもって接する。他の子どもたちと一緒に活動や遊びに参加するよう促し、仲間に受け入れられ、認められていると感じるように努める。また、グループの動態を観察する機会を捉え、必要に応じて介入し、子どもたちの間で友達を受け入れ、思いやれる力を伸ばすようにする。

このアプローチを選んだのはなぜか： 子どもにとって仲間はずれにされたと感じることは辛いことであり、帰属意識や自尊心にも影響を与える可能性がある。子どもたちを積極的に活動に参加させ、助けあう環境を作ることで、子どもたちの自信を高め、人間関係を向上させ、疎外感を克服するレジリエンスを育む手助けをしたいと考えている。

シナリオ 2: 友達と喧嘩した

CS-1: このシナリオで保育者としてどう関わるか： まず喧嘩した子どもたちを落ち着かせ、それから子ども同士で何が起こったのかを話し合わせ、彼らの気持ちを受け止める。相手を思いやらない行為は良くないことを思い出させ、彼らの行動の結果について話し合う。それから、相手に謝って、握手やハイタッチをして仲直りしたいか尋ねる。いやだと言われたら、気持ちが落ち着くまでもう少し時間を与える。

このアプローチを選んだのはなぜか： 衝動的な行動には人間的かつ共感的なアプローチが必要だと思うから。

CS-2: このシナリオで保育者としてどう関わるか： ここでは、子どもたちがおもちゃをめぐって喧嘩した例を取り上げる（実際に私のクラスで起こったことである）。まず子どもたちに喧嘩をやめるように言い、「動揺している」子どもをなだめる。次に、「攻撃的な」子どもに1分間のタイムアウトを与え、気持ちを落ち着かせる。子どもたちが落ち着いたら、おもちゃを共有するときの正しい振る舞いについて話す。おもちゃを借りたいときには、「おもちゃを借りてもいいかな？」と、丁寧に頼むことの大切さを言い聞かせ、私の後に続いて同じように言ってもらう。子どもたちと話す時は、どちらかをえこひいきしたりせず、冷静で公平な態度を保つようにする。おもちゃのことで人を傷つけたり、友達と喧嘩したりしてはならないこと、遊べるおもちゃは他にもたくさんあることを言い聞かせる。それから、お互いに謝って仲直りするように促す。

このアプローチを選んだのはなぜか： 幼い子どもは自己中心的で、他者の気持ちを理解できず、何かを頼む時に丁寧に表現する語彙が不足していることが多い。これが喧嘩の原因になること

もある。従って、子どもが他者のおもちゃや品物を借りたい時に用いる適切な言葉を教えることが重要になる。また、意見の衝突があった時に仲直りする方法を教えることも重要。

CS-6: このシナリオで保育者としてどう関わるか: まず喧嘩している子どもたちを引き離して落ち着かせる。それから、一人一人に話しかけ、なぜ喧嘩になったのかを尋ねる。そして、人が怒っているときに何をすべきか、何をすべきでないかについて話し合う。どちらの子どもも落ち着いたら、相手に謝り、握手をして、今後は怒りを抑えることを約束するよう促す。これから長い間、同じクラスなのだから、相手を思いやり、一緒に学ぶ必要があることを言い聞かせる。

このアプローチを選んだのはなぜか: このアプローチを選んだのは、子どもたちを引き離して個別に話をするためである。なぜなら、子どもによっては成熟度が異なり、感情の制御が同じようにできないからである。集団生活では、他者と仲良く過ごし、遊ぶことを学ばなければならないことを思い出させる。

シナリオ 3: 親しい周囲の人(大好きな先生や仲良しの友達など)が引っ越していなくなってしまった

CS-3: このシナリオで保育者としてどう関わるか: ここでは、仲良しの友達が引っ越した例を取り上げる。人気者の子どもが引っ越してから 1 週間後、クラスメートたちはその子がなくて寂しいと言っていた。そこで、もう一度顔を見て話ができるようにビデオ通話をしようという意見が出た。私はその子の母親に連絡し、ビデオ通話に都合のよい時間を設定した。クラスメートたちはその子の顔を再び見ることができ、とても喜んだ。その後 2 週間で 3 回のビデオ通話を行ったが、クラスメートたちはその子が無事に過ごしていることを知って安心し、満足したため、彼らの寂しい気持ちは徐々に薄れていった。

このアプローチを選んだのはなぜか: このアプローチは子どもたち自身のアイデアから生まれた。私は、保育者として、子どもたちが引っ越した友達を恋しく思う気持ちを乗り越える機会を提供した。友情をもつことは良いことであり、それを失った時に対処する方法を見つけることがレジリエンスだと考えている。(他のケーススタディ回答者 2 名もこのシナリオを選択したが、対処法の方法は述べていない)

シナリオ 4: 家庭内で辛いことがあった(親に叱られた、親同士の喧嘩、家庭内の雰囲気が良くないなど)

CS-1: このシナリオで保育者としてどう関わるか: ここでは、家族の死を例に取り上げる。私はその子に特別な注意を払い、気長に待って寄り添い、その子がお絵描きなどで感情や悲しみを発散できるように手助けする。その子に描いた絵について話してもらい、その話に耳を傾ける。クラスでは、死について話すことは通常避けている。その子には、十分な注意と優しさをもって、ゆっくりと園の日常的な活動に戻らせる。私は、遊びが重要であり、セラピーの一種として悲しんでいる子どもの癒しに役立つと考えている。また、その子の保護者と連絡を取り、感情面や教育面の進捗を注意深く観察する。

このアプローチを選んだのはなぜか: 悲しみに暮れる子どもは、周囲からの愛情あふれる配慮、同情、思いやりを必要としている。忍耐と思いやりに基づいたアプローチは、子どもが日常生活に戻れるよう手助けするための最善の方法である。

CS-2: このシナリオで保育者としてどう関わるか:ここでは、実際に起こった出来事を例に取り上げる。ひとりの子が悲しそうな顔をして教室にやってきたので、尋ねてみると、母親が大事な仕事に遅れそうだったのでお弁当を用意してくれなかったとのことだった。私が幼稚園で用意する食事を食べるように勧めると、最初は悲しそうで、今にも泣き出しそうだった。そこで、お母さんは朝やることがあまりにも多くて大変なので、幼稚園で用意するお昼を食べることにすれば、お母さんもういぶん楽になると説明した。するとその子は同意し、幼稚園で出される食事を食べるからお弁当を持ってくる必要はないと、母親に話すと答えた。その子はまだ4歳だったが、母親の大変さに共感を示すことができると知り、私も嬉しく感じた。

このアプローチを選んだのはなぜか: その子に母親が家事や職場の仕事でいろいろ大変なことを理解して、共感してもらいたいと考えた。

CS-4: このシナリオで保育者としてどう関わるか:ここでは、母親が交通事故に遭った子どもの例を取り上げる。子どもは遅れて到着し、軽い交通事故に遭ったばかりのトラウマから極度の動揺と震えを見せていた。私は、その子を座らせ、何が起こったのかを話したいかと尋ねた。すると、自分たちの車に突然別の車が衝突してきたこと、車にはきょうだいに乗っていたことを話してくれた。その子は、衝突の大きな音と車から投げ出されそうになった衝撃で、ひどく動揺していた。事故を知ったクラスメートたちは同情し、幼稚園へ一緒に登降園することを申し出るなど、進んで助けようとする態度を示した。

このアプローチを選んだのはなぜか: 私は強みに注目するアプローチを採用した。その子は既に困難に対処する優れた能力と強みをもっていたが、母親の車が修理されればすべて正常に戻るという考えをしっかりとてように、精神的なサポートと安心させてくれる言葉を必要としていた。友だちから思いやりの言葉をかけられると、問題はすぐに解決するという思いと安心が強まったようだった。

CS-5: このシナリオで保育者としてどう関わるか: ここでは、両親が離婚手続きで親権争いをしている子どもの例を取り上げる。その子を観察してみると、強い不安を感じ、引きこもりがちになっていることに気がついた。その子にカウンセラーと話すよう勧めたが、「知らない人」と話すことを嫌がった。そこで、比較的成熟していて思いやりのある数人のクラスメートに、その子のそばにいますよう頼んだ。私は授業中も、その子に特別な注意を払い、しよっちゅう励ましの言葉をかけた。

このアプローチを選んだのはなぜか: その子を見ていると、教室でクラスメートと一緒にいる方がリラックスでき、安心していることがわかった。園には、その子のことを気にかけて、幸せでいてほしいと考える仲間がいることを知ってもらいたかった。クラスメートの精神的なサポートは、その子がつらい気持ちに対処する手助けになったと考えている。

CS-6: このシナリオで保育者としてどう関わるか: ここでは、両親が離婚して別居している子どもの例を取り上げる。その子が問題に対処できるように私が取ったアプローチは、園にいる間や保育時間中に、その子にもっと注意を向けることだった。それ以外の時には、その子のそばに行き、宗教的な話や民話などを聞かせた。その子は次第に物語に関心を向けるようになり、返事をしたり質問したりし始めた。また、クラスに積極的に参加するようになった。

このアプローチを選んだのはなぜか: その子が家庭でストレスに晒されていることに気づいたため、物語を話して聞かせることにより逃げ道を与えようとした。結果として、ネガティブな感情から気をそらすことができ、その子は物語に興味をもち、考えることに夢中になった。

CS-7: このシナリオで保育者としてどう関わるか: その子を支えるために、自分の気持ちや感情を表現できる安全で心地よいスペースを用意する。その子の話に注意深く耳を傾け、体験したことを受け止めてやり、安心感とサポートを提供する。また、その子がリラックスして、ストレスや不安に対処できるように、気持ちが落ち着く活動や遊びに参加させる。

このアプローチを選んだのはなぜか: このアプローチを選んだのは、家庭で心を乱す出来事を経験することは、子どもにとって感情的につらいことであり、その子のウェルビーイングや園での行動に影響を与える可能性があるためである。精神的なサポートと養育環境を提供することで、その子どもが自分の感情に対処し、逆境に適応するレジリエンスを養い、困難な時期に安心や大事にされていることを感じられるように手助けしたいと考える。

ケーススタディの保育者たちにとって、上記のシナリオの大半は日常業務ですでに経験していることであるため、どのように行動し、なぜそうするかを説明することができた。保育者たちは、これらの子どもたちが社会情動的スキルの発達途上にあり、特別な状況に置かれたそれぞれの子どものニーズに応じて、人間的で共感的なアプローチを用いることにより、レジリエンスを育む手助けをすることが重要であると考えていた。保育者の中には、宗教的な指導も、困難な状況に置かれた子どもたちの発達と適応力を支える重要な方法であると考えてる者もいた。保育者の多くは、子どもが問題や困難に適応し、乗り越えるのを助けるために、保護者が関与する必要があることも指摘していた。

5.8 子どものレジリエンスを評価する方法を探る

子どものレジリエンスの発達度を測定することは、レジリエンスの多面的な性質、標準的な評価ツールの欠如が原因で、困難なものとなっている。この調査レポートでは、さまざまな幼児教育の現場にいる7人の参加者とのインタビュー結果に基づいて主題分析を行った。分析では、保育者が子どものレジリエンスを評価するために使用する方法、評価ツールの利用可能性、評価の内容について検討した。

• 正規の評価ツールの欠如

参加者たちは、複数のケーススタディを通じて、子どものレジリエンスの発達度を測定するために設計された正規の評価ツールが存在しないことを指摘している。CS-1の回答者は、正規の評価ツールがないため、エピソード記録をレジリエンスの評価に利用していると答えている。同様に、CS-7の回答者は、既存の評価ツールが社会情動的スキルではなく学業成績に重点を置いていることを指摘し、レジリエンスの測定手法に対する認識が低いと述べている。この課題は、幼児教育におけるレジリエンス評価ツールの開発の必要性を浮き彫りにしている。

• 保育者の観察と判断力に依存したレジリエンスの評価

保育者たちは、正規の評価ツールが欠如しているため、子どものレジリエンスを評価するにあたり、継続的な観察と判断力に大きく依存していると述べている。CS-2の回答者は、レジリエンスの育成を目的とした介入の前後に、継続的に子どもたちを観察し、それに基づいて判断を下していることを認めている。同様に、CS-3の回答者は、観察とエピソード記録を使用し、困難を乗り越える努力に焦点を当て、子どものレジリエンスを評価している。この課題は、標準的な評価尺度が欠如しているため、子どものレジリエンスを評価する保育者の専門知識と直感の重要性を強調している。

- 評価の項目

正規の評価ツールが欠如しているものの、保育者たちはレジリエンスの評価に含めるべき重要な項目を指摘している。CS-4 の回答者は、レジリエンス評価の必須項目として、自信、自尊心、感情表現、問題解決力、勇気などを取り上げている。同様に、CS-6 の回答者は、子どもの行動、性格、動機、自立心、タスクに取り組む粘り強さを観察することの重要性を重視している。この課題は、レジリエンスの多面的な性質と、一連の社会情動的スキルやコンピテンスを評価する必要性を強調するものとなった。

主題分析の結果、保育者が子どものレジリエンスの発達度を測定する際に直面する困難と、これらの困難を克服するために採用している戦略に関し、すべてのケーススタディにおける共通点が明らかになった。保育者たちは、正規の評価ツールが欠如しているため、観察、エピソード記録、判断力を駆使してレジリエンスを評価するという高い処理能力を実証していた。また、評価の必須項目として、自信、自尊心、感情の制御、問題解決力、および社会的スキルが指摘された。ただし、保育者が子どものレジリエンスを評価するために信頼性の高い有効な方法を用いることは依然として必要であり、幼児教育におけるレジリエンスに特化した標準的評価ツールの開発が問われるところである。

ここまでの結果をまとめると、正規の評価ツールの欠如およびレジリエンスの多面的な性質が、子どものレジリエンスの発達度を測定することを困難にしている。保育者は、自信、感情の制御、問題解決力などの重要な評価項目に焦点を当て、継続的な観察と判断力に頼ってレジリエンスを評価している。しかし、幼児教育におけるレジリエンスの測定に特化した標準評価ツールの開発は依然として必要とされる。今後の研究では、信頼性の高い有効なレジリエンスの指標を特定し、子どもの社会情動的発達の複雑さを捉えた評価ツールの開発に焦点を当てることが重要になろう。

5.9 保護者にフィードバックを提供する際の戦略とアプローチ

幼児教育の現場において子どものホリスティックな発達を促進するには、保育者と保護者との効果的なコミュニケーションが不可欠となる。そのため、主題分析を行い、保育者が子どものレジリエンスと社会情動的スキル (SES) の進捗と発達度に関して保護者に提供するフィードバックの種類について検討した。その結果、以下の課題が明らかになった。

- 定期的なフィードバック

参加者たちは、保護者が子どもの成長について常に把握できるよう、定期的なフィードバックを行う重要性を指摘している。例えば、CS-1 の回答者は、3 ヶ月ごとに保護者会を行い、子どもの社会情動的スキルとレジリエンスの発達度についてフィードバックを提供していると述べている。同様に、CS-2 の回答者は、2 ヶ月または 3 ヶ月ごとに、学業成績とレジリエンスの育成に重点を置いたフィードバックを保護者に提供していると答えている。この課題は、一貫してタイムリーなフィードバックを保護者に提供するために、構造化されたコミュニケーションチャネルを確立することの重要性を強調している。

- 一人一人に合わせたコミュニケーション

保育者たちは、保護者にフィードバックを提供する際に、一人一人に合わせたコミュニケーションの重要性を指摘している。CS-3 の回答者は、子どもの社会情動的スキル、性格、興味、才能の発達レベルを詳細に述べた叙述式レポートを保護者に提供していると述べている。同様に、CS-7 の回答者は、保護者との非公式な会話で、子どものレジリエンスを示す具体例や行動に重点を置いたフィードバックを伝えるようにしていると答えている。この課題は、それぞれの保護者のニーズや懸念事項に対応するために、カスタマイズしたフィードバック戦略が必要であることを強調している。

- **秘密保持とプライバシー**

参加者たちは、子どもに関するフィードバックを共有する際に、秘密保持を遵守し、保護者のプライバシーを尊重することの重要性を指摘している。CS-1 の回答者は、子どもたちの記録を極秘に取り扱い、両親や保護者のみが閲覧できるようにしていると述べている。同様に、CS-6 の回答者は、便利でプライベートなコミュニケーションチャネルを提供する WhatsApp アプリを利用して保護者にフィードバックを提供していると説明している。この課題は、子どもに関する機微情報を秘密に保つことにより、保護者との信頼関係を築くことの重要性を強調している。

幼児教育において、保護者へのフィードバックは、子どもの発達を促進し、保育者と保護者との協力関係を育む上で重要な役割を果たす。効果的なフィードバックの重要な要素として、定期的なフィードバックを実施し、コミュニケーション戦略をカスタマイズし、秘密保持とプライバシーを尊重することが挙げられる。保育者は、保護者が子どもの成長や発達度について常に把握できるように、保護者とのオープンで透明性のあるコミュニケーションチャネルを維持する必要がある。これによって、最終的には子どものホリスティックな発達とウェルビーイングを促進することができる。

6.0 考察および結論

6.1 園がレジリエンスを育むために実践している取り組み

調査の結果、マレーシアの園が子どものレジリエンスを育むために採用している多面的な戦略が明らかになった。注目すべきアプローチの 1 つは、子どもたちに帰属意識と安心感を与えるソーシャルサポートネットワークの構築に重点を置いたものである。保育者は、クラスメートとの積極的な交流を促進し、協力的な活動を奨励することで、子どもたちが助けを得られ、大事にされていると感じられる環境を作り、困難に直面した場合のレジリエンスを育成する。

さらに、この調査の結果、レジリエンス育成の取り組みの重要な要素として、感情制御スキルの指導が重視されていることが明らかになった。保育者たちは、子どもが自分の感情を理解して上手にコントロールし、ストレスや挫折に対処できるように手助けすることの重要性を認識していた。子どもは、ストーリーテリング、ロールプレイ、マインドフルネス練習などの活動を通じて、建設的な方法で自分の感情を認識し、表現することを学び、情動的なレジリエンスを高めることができる。

さらに、子どもの自立心と自信を高めることも、レジリエンスを育む上で重要な取り組みであると指摘されている。保育者たちは、子どもが自主的に探索、実験、挑戦する機会を提供することで、主体性と自己効力感を育む。子どもが達成したことを褒め、障害物に直面しても粘り強く取り組むよう励ますことで、子どもが自信とレジリエンスをもって人生の浮き沈みを乗り越えられるよう、レジリエントな考え方を育めるようにしている。

6.2 「レジリエンス」と「社会情動的スキル」という用語に対する認識

この調査の結果、マレーシアの文化的背景において、「レジリエンス」と「社会情動的スキル」に対する理解の微妙な差異が明らかになった。参加者たちは、さまざまな背景をもつ子どもや保護者にこれらの概念を適切に伝えるためには、明瞭な定義と文化的相違の配慮が重要であると認めている。

レジリエンスを伝える際に使用するマレー語の「berdaya tahan」は、知恵、自信、共感力などの文化的価値観を反映しており、これらは現地の子どもたちのレジリエンスにとって不可欠なものである。こうし

た微妙な言語的差異があることは、幼児教育の現場においてレジリエンスや社会情動的スキルについて論じる際に、保育者が文化的視点を考慮して、異なる文化的背景をもつ子どもや家族に伝える必要があることを強調している。

さらに参加者たちは、子どもの社会情動的発達を形成する上で文化的慣習が果たす役割を認識し、文化的価値観と伝統をレジリエンス育成の取り組みに統合することの重要性を指摘している。保育者たちは、多様性を尊重し、共感と理解を促進する文化的な活動や物語を取り入れることで、すべての子どもがレジリエンスの育成において大事にされ、助けを得ることができると感じられる、インクルーシブな学びの環境を作っている。

6.3 結論

調査の結果、マレーシアの園が子どものレジリエンスを育むために採用している多様で文化的相違に配慮した取り組みが明らかになった。保育者たちは、ソーシャルサポートネットワークを構築し、感情制御スキルを教え、自立心と自信を促す方法を統合することにより、子どもが情動面と学力面で成長できるインクルーシブな学びの環境を作っている。保育者たちはさらに、レジリエンスと社会情動的スキルについて論じる際に言語的なニュアンスと文化的視点を考慮することで、すべての子どもと家族にとってこれらの概念が意義あるものとして捉えられるようにし、幼児教育の現場において帰属意識とエンパワーメントを育んでいる。

REFERENCE

- Adams, C. R., Barrio Minton, C. A., Hightower, J., & Blount, A. J. (2022). A Systematic Approach to Multiple ケーススタディ Design in Professional Counseling and Counselor Education. *Journal of Counselor Preparation and Supervision*, 15(2). Retrieved from <https://digitalcommons.sacredheart.edu/jcps/vol15/iss2/24>
- Bloor, M., Frankland, J., Thomas, M., & Robson, K. (2001). *Focus groups in social research*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications Inc.
- Schembri, N., & Jahić Jašić, A. (2022). Ethical issues in multilingual research situations: a focus on interview-based research. *Research Ethics*, 18(3), 210-225. <https://doi.org/10.1177/17470161221085857>
- Yin, R.K. (2003) *Case Study Research: Design and Methods*. 3rd Edition, Sage, Thousand Oaks.

別紙 1

資料1：予備調査（フォーカスグループインタビュー）の質問項目の概要

園の管理職／運営者／管理者の下記についての認識を調査:

- 1) 幼児教育施設の管理職／運営者／管理者の「社会情動的スキル」「レジリエンス」の言葉の認識について
 - あなたは「社会情動的スキル」をどういう意味で捉えていますか？
 - 社会情動的スキルが高い子どもとはどんな子でしょうか？
 - 子どもの社会情動的スキルを育むことは大事なことだと思いますか？
 - どのような社会情動的スキルを育てることが大事だと思いますか？
 - あなたは「レジリエンス」をどういう意味で捉えていますか？
 - レジリエンスがある子どもとはどんな子でしょうか？
 - 子どものレジリエンスを育むことは大事なことだと思いますか？
 - あなたの園の先生方は、「社会情動的スキル」や「レジリエンス」ということばを知っていると思いますか？
- 2) 現場の先生に「レジリエンス」についてどのような聞き方をすればよいか
- 3) レジリエンスや関連する社会情動的スキルを育むための育成プログラムや教材など、園で導入されているものについて（あれば）教えてください。
- 4) レジリエンスや関連する社会情動的スキルを育成するために、どのようなアプローチをとっておられますか？具体的な活動や実践の内容について、ご存知の範囲で教えてください。

資料2：本調査インタビューの質問項目の概要

目的：主任保育者の下記についての認識を調査:

(1)「社会情動的スキル」の言葉の認識

- あなたは「社会情動的スキル」ということばを知っていますか？
- どのような社会情動的スキルを育てることが大事だと思いますか？（あなたの国や文化において／保育者個人として）思いつくスキルをいくつでもあげてください。
- 社会情動的スキルが高い子どもとはどんな子でしょうか？
- 子どもの社会情動的スキルを育むことは大事なことだと思いますか？

(2)「レジリエンス」の言葉の認識

- あなたは「レジリエンス」ということばを知っていますか？
- あなたは「レジリエンス」をどういう意味でとらえていますか？
- レジリエンスがある子どもとはどんな子でしょうか？
- 子どもへのレジリエンスの育成は大事なことだと思いますか？

(3)「社会情動的スキル」や「レジリエンス」などの用語を知っている／聞いたことがあるとしたら、どこで学ばれましたか？

(4)あなたが想定する4歳～6歳の子どもにとっての「困難」や「逆境」とはどのようなことですか？

(5)あなたが想定する4歳～6歳にとっての「うまく適応する」「立ち直る」とはどのようなことですか？

(6)あなたやあなたの同僚の先生は、子どもたちにレジリエンスを育むために、どのようなアプローチをとっておられますか？具体的に園の実践や活動の中で、どのような場面がありますか？

(7)レジリエンスを育むための育成プログラムや教材など、園で導入されているものがあれば教えてください。

(8)4つのシナリオから2つかそれ以上を選んで、選んだそれぞれのシナリオの子どもに対して、「保育者としてどう関わるか」「それはなぜか」を教えてください。

(9)子どもたちのレジリエンスの到達状況をどのように測定／評価／判断されますか？

(10)子どもたちのレジリエンススキルの到達状況を測定するためのアセスメントツールはありますか？（ある場合）そのアセスメントツールの中身はどのようなものですか？

(11)子どものレジリエンス到達状況について、保護者にフィードバックをされますか？
（される場合）フィードバックを行うとしたら、その中身はどのようなものですか？